



TITLE:

国家の社会学的研究(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

高島, 昌二

CITATION:

高島, 昌二. 国家の社会学的研究. 京都大学, 1964, 文学博士

ISSUE DATE:

1964-06-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211272>

RIGHT:

【 1 】

氏 名	高 島 昌 二 <small>たか しま しょう じ</small>
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	文 博 第 9 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 社 会 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	国家の社会学的研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 島 芳 夫 教 授 田中美知太郎 教 授 井上智勇

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は特殊社会学としての国家社会学の立場と方法とを明らかにし、同時にこの立場から新たなる国家理論を樹立することを意図したものである。論文は第一章「国家社会学方法論」、第二章「国家と社会」、第三章「国家の本質」、第四章「民族と国家」、第五章「民族と国家に関する実態調査」の五章より成る。第一章は国家社会学の対象と方法を明らかにする。著者は国家を論ずる学者のほとんどすべてが個人の価値判断や時代の実践動向に影響され、認識の客観性が評価の主観性のゆえに歪められやすい点に注目し、国家の研究者は可能態または理想態としての国家でなくて実在としての国家に関する純粹理論を確立することに努力すべきであるとする。つづいてシュタムラー、ケルゼンに特徴的な規範と存在の二元論に基づく新カント学派の方法を批判し、さらに著者の意図する国家社会学は、国家存在の一切の有り方を総合的に考察することを目的とせず、従来の学問の分業を尊重し、人間の社会的結合を重点的に取扱い、特定の意味内実と結びついた国家の社会団体的性格を分析する特殊社会学であることを示す。第二章は国家と社会との関係を究明する。まずジンメル、フィアカント、ウィーゼ、ウエーバーの社会概念を論述し、社会は人と人との相互関係以上に永続性をもつ存在、すなわち精神的事実の領域とともに客観的精神成態の領域をあわせ含むこと、而して後者における社会は「社会団体」(sozialer Verband)というべく、客観的精神成態としての国家はかかる社会団体としての社会であることを明らかにする。ついで著者は、国家が法的政治的意味構造を有する特殊な社会団体であり、その包括性において多くの団体中独特の位置を有し、そしてこの包括性とは国家が他の多くの団体を自己の構成部分として含む広い統一性を意味すると主張する。次に著者は全体社会の概念を取り上げ、国家はその管理の包括性において他の諸団体と違った特殊性を有するが、全体社会とは区別さるべきだとする。国家の存在根拠として 1. 社会内部の秩序維持と諸要素間の調整、 2. 外敵に対する防衛が挙げられる。かかる要求は同一地域において成り立つ全体社会に内含されるもので、この要求を満たすために国家組織が発生すること、国家は全体社会に実体的基礎をもち、逆に国家は全体社会の形成、拡大の基礎となる面を有することを明らかにする。次にマッキーバ

ァーのコミュニティとアソシエーションの理論を論述し、多元的国家論の理論的系譜を説明して、イギリスに生れたこの思想はグリーン、ボザンケットによって鼓吹されたヘーゲル的国家論に対する論難を直接の誘因とし、自由主義の一表現と見る。ついでアソシエーションの理論的分析に移り、これを特殊な関心充足のための機能を中心として形成されたものと解し、近代社会はかかるアソシエーションが多様に分化・対立するところにその特色があるとし、国家も多元論的にはアソシエーションの一つであるが、しかしそれは民族という代表的なコミュニティの統制機能であるところにその独特の機能があるとする。さらにマッキーバー、ラスキ、コールの国家論を説き、国家と全体社会の同一化を否認した多元的国家論が資本主義内部の矛盾の表面化とともに、ラスキにおいては階級国家論へ、マッキーバーにおいては福祉国家論への変貌が生じた過程を明らかにし、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの階級国家論、国家死滅論とこの主張の変容過程とを述べ、国家死滅論を批判する。第三章はまずイエリネックの国家社会学の土地、人民、権力の三要素に対する考察が総合的でないことを明らかにし、国家の社会団体的性格は人々の生活圏としての土地を土台とし、他の社会団体と動態的支配関係に立つ意味的統一にあるとする。著者は多元的国家論の国家一部分社会説の功績を認めながらも、国家と他のアソシエーションとの相違を明らかにするにはその独特の組織性を明確にする必要があるとし、その特徴を組織の強制性に認める。しかしこの強制性は国家権力を背景とする国法の強制性の中に現わるとするが、さらに国家の強制拘束の一面としての支配・服従の社会学的分析を行ない、ウェーバーの所説に従って権力の本質を行為主体が自己の意志を実現し得る優越した力と規定し、国家権力の特質として 1. 物理的強制力であること、 2. 国家社会を基盤とし、その全域にわたって規制することにあると論じ、ついで国家権力の正当性の根拠とその類型を明らかにし、国家主権を論じて、それは国家目的遂行に必要な最高の実力であるとする。第四章は従来の国家論が一般に閑却し来った国土と人民の問題を主題とし、人民の中樞を成す民族と国土との関係を社会的に考察する。まず民族の本質を論じ、民族と人種、民族と運命の共同、民族と言語、民族と宗教、民族と土地の関係を明らかにし、民族の基底を文化共同態におく。次に民族と国家の関係を論じ、両者は同一ではないが民族は自己の秩序と防衛の必要から国家組織を作るとする。さらに国家とナショナリズムの関係を論じ、多くの学説を検討して民族が自己の国家をもってその統一、発展を志向する集団感情・行動原理と規定し、この集団感情と祖国・国土との関係において愛国心の問題を究明する。著者は進んでナショナリズムの類型を論述して諸家の類型区別を考察した後、西洋型ナショナリズム、西欧類似型ナショナリズム、アジア型ナショナリズムの三つに分け、それぞれの特徴を明らかにする。第五章は日本人の民族と国家に対する意見・態度を昭和37年7月20日より12月6日にわたって実態調査した結果の詳細な報告である。それは 1. 国家ないし祖国意識に関する態度、 2. 日本民族に対する態度、 3. 他民族に対する態度、 4. 他民族に関する偏見の四項目をさらにそれぞれ小項目に分類し、全二十五項目にわたって質問調査している。実際に分析の対象になったのは調査票配付総数 4,500 名中の約96% 4,334名で、学歴別、年齢別、性別、地域別、職業別に分類・分析している。

論文審査の結果の要旨

国家に関しては古来学問の各分野において研究されてきたが、しかし国家の本質全体がこれによって客

観的に明らかにされたとはまだいい難く、またその研究方法にも問題が残されている。かかる状況において、特殊社会学としての国家社会学の新しい分野を広い学識と周到な態度とをもってその方法論的反省と内容的研究の両面において開拓しようとする著者の試みは極めて意義あるものである。著者が国家に関する従来の多くの学説を広汎綿密に検討しながらこれらに対して社会学的立場から妥当な批判を加えるとともに、それらを自己の国家理論樹立に積極的に生かした努力は、広く国家論に通ずると同時に他面社会学的諸理論を深く体得して始めて可能なことであり、高く評価すべき業績である。特に全体主義的国家論の批判として現れた多元的国家論に歴史的意味を認めるとともにその限界をも指摘し、民族の社会学的究明を通して独自の国家理論を展開する著者の試みは十分認められてよいであろう。尤も論文の内容が多方面にわたっているために究明の足りない点も存在する。国家権力発生の歴史的過程や、民族と階級、主権と国際法との関係の如きそれである。しかしこれらの問題は著者の今後の研究に属し、本論文の価値はこれによって傷つけられるものではない。なお日本ナショナリズムの実態調査は理論と実証とを併用する著者の周到な研究態度から行なわれたもので、調査の全国的な広さと着実な方法から見て、この時点での試みとしては十分な信頼度をもつと認められる。ただ調査の完璧をはかるには将来にまつべき点があるにしても、これによって今後の研究に貴重な一資料が加えられたというべきである。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。